

椿説弓張月

箱

13
2945
4



特

冊 へ 13
2945
巻 4

野風陣没
八代殿戦
活路を閉
飛矢は當

野風陣没
八代殿戦
活路を閉
飛矢は當

昭和九年七月九日購求

鎮西八郎 椿説弓張月前篇卷之四
為朝外傳

東都 曲亭主人編次

第九回

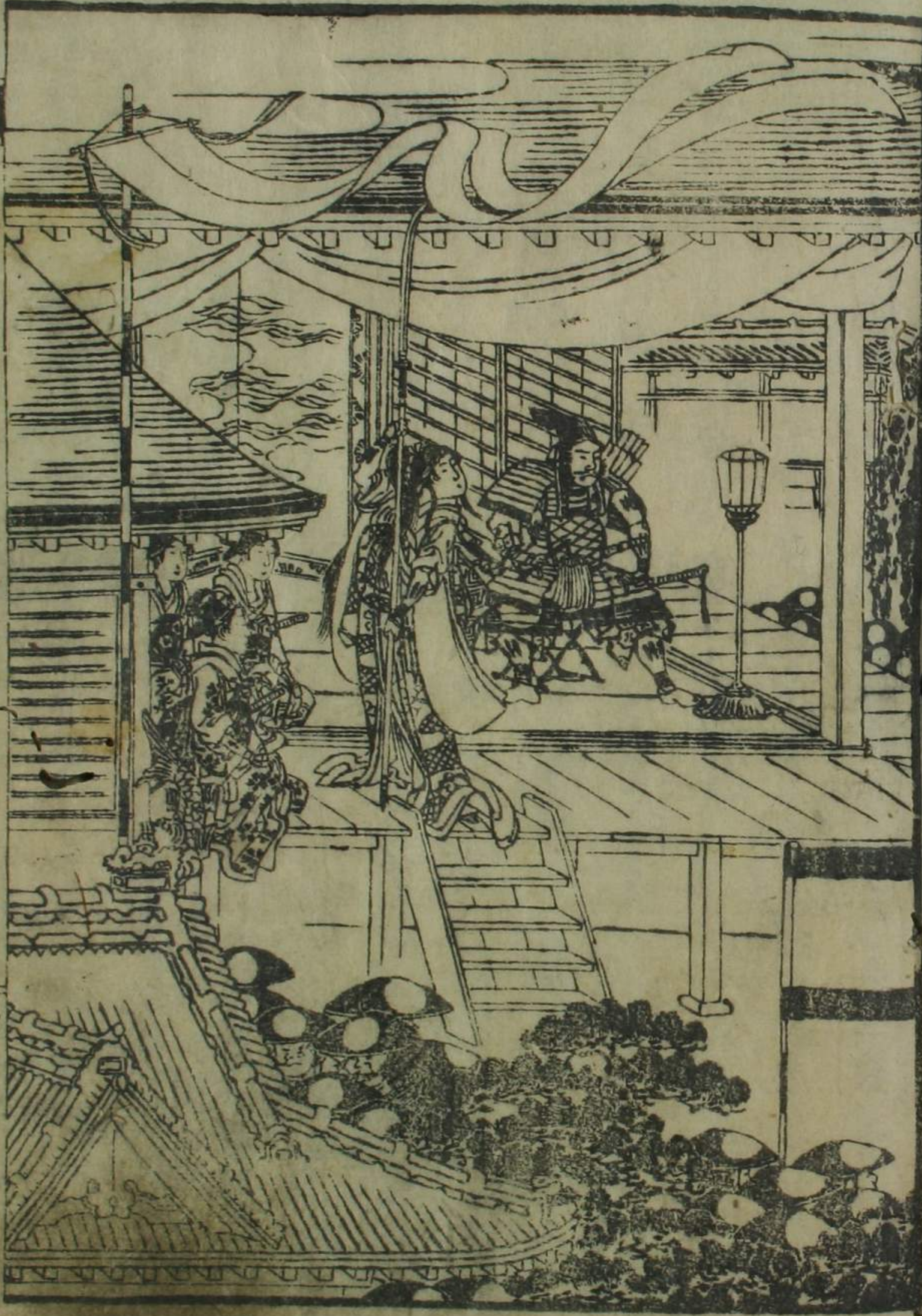
野風陣没 活路を閉
八代殿戦 飛矢は當

官軍ハ新院をぞめてまつり討りしつ宗徒の武士を召捕りし
軍兵は各部に隈り索すわせり。當下公御會議あり
爲朝尙西園へ逃るるに洛合戦あり。遠馬をり。菊池原田が許へ仰つ
が妻子を生拘り進みまよ。遠馬をり。菊池原田が許へ仰つ
於太宰府へ逃るるに洛合戦あり。遠馬をり。菊池原田が許へ仰つ
士卒まかす。去るるに洛合戦あり。遠馬をり。菊池原田が許へ仰つ
の曹司の入り。去るるに洛合戦あり。遠馬をり。菊池原田が許へ仰つ



目みる馬よすあふると裾繩目の鏡は高角打る兜を戴く鹿毛ある馬に乗
る武者二騎篝火の光は馬をまめ汝もどや洛は八新院の謀反發
覺汝もが主君とてのころる為朝も院の御所ふかりしがいぬ十日に
あふん足もみく打負く生死もあはれどあり多きかといふ菊池原田が股肱
腹心の家隸は王名太郎守土平三郎といふのこが主儀頭は言上旨を衆
に為朝が氏族親族を生拘く進せん為發向せりこころを伏境を脱
く縛を受よとそ回答多高間四郎巖然とうち笑ひ九箇國を管領
く武勇海内は輝る御曹司の館小夜討する久神は誘はる山賊野
伏の所為あふん魚ひしも兼比呂田の聲は勅命を宣ふく向ひあは
れよ夜も深ければ待をさ物こそあはれ但鎌よく剣は征矢の用意い
とせし受くえん多といひも敢まよ引弾と發つ矢王名太郎が内兜

は崑深くくさく立しふ忽地馬より撞と落るを差詰り詰り経小
少一射あふすされく色めく処を忠國一の木門をふくと用を百五十騎の兵
を前後左右お従く驀地お走出り吉田高間もこれをもく屋上樓より
走りおり續く敵まは向ひ面もあはれど挑し戦ひ寄る大軍ありと
いふも死を究る忠國の百五十騎は切とせられ一町あきり退くを忠國の
まもも逐くあつらふら入り人馬を休る小身方も三十騎の源康を
肩二十騎の討れり白縫は日末雄々さひありく鉄打る鉢巻一
く小具足小肚甲さかめ白柄の長刀をこそとこそと紀平治の毒の八
代以下廿餘人の女使をこみ一般お打扮せ床几小尻をうけ在せり
の後方は居ありき只今の一戦はさこそ疲勞まひりぬかかりて一
防さあせとけいんとつを忠國頭をうちありきまねとめ洛は合



宰府の
城を
忠國
戦死
せ



ひろしの理を脱... この大軍を引受... 屍を戦場... 曝...
 武者は常や... 敢悔... 親子の元... 一世の縁... 養の恩... 脱...
 大... 親子の元... 一世の縁... 養の恩... 脱...
 関の声... 高間四郎... 鎧... 立矢... 夥... 黒皮威... 流...
 鮮血... 紅威... 漆... 大床... 走り... 敵... 既に... 木門...
 攻... 吉田兵... 討... 防矢... 阿曾忠... 荒...
 生害... 敵軍... 走... 阿曾忠... 荒...
 八代... 夫紀平治... 洛... 討... 八代...

存命... 君の先達... 一旦大殿... 安... 馬... 抱... 忠... 四五十騎... 兵... 血...
 西の門... 忠... 討... 四五十騎... 兵... 血...
 終... 寄... 軍兵... 木門... 追退... 追退... 追退...
 疾... 負... 舊... 必... 立... 既... 洛... 白...
 高間四郎... 招... 錯... 首... 敵...
 火... 放... 上... 帶... 解... 鎧... 脱... 捨... 肚... 一...
 館... 火... 白... 縫... 八代... 九... 餘... 人...

春... 八代...



春見の月



木言

使をおく。西の門より走り出ふ。さうもさうも。手すりぬとて。闇夜に
 是く。兜の星八片。とて。白梅頭上。同と。輕盈なる。黄花庭除を。照らす
 異る。とて。敵の門を。却く。をる。とて。城兵の。落ゆ。とて。れ討。苗人の。衝
 うつ。折。も。烏朝の。畜押。る。野風。と。は。狼の。白縫。み。先。と。門。より。衝
 と。走り。出。ふ。を。あ。軍兵。は。駈。ひ。い。當。る。を。さ。わ。ひ。は。墮。倒。せ。ら。し。い。ひ。ひ。ひ
 と。雜。兵。へ。向。腹。を。咬。是。肩。腰。を。折。り。右。往。左。往。乱。是。騒。く。白
 縫。八。代。の。太。刀。長。刀。の。刀。尖。を。揃。へ。吐。と。嘯。と。走。り。か。り。東。を。歩。西
 を。靡。け。一。條。の。血。路。を。切。り。と。東。南。を。投。り。走。り。狼。の。爪
 主。を。斬。り。落。し。ん。や。思。ひ。ん。処。も。去。り。跳。め。ぐ。弓。矢。を。怕
 して。刀。劍。を。も。避。り。騎。馬。武。者。を。馬。の。双。膝。に。嚙。著。り。互。落。を
 歩。武。者。を。砂。汰。蹴。り。け。眼。を。遮。り。な。ど。せ。淫。子。寄。手。と。れ。小。碎

易。只。遠。矢。よ。射。と。と。人。と。と。野。風。猛。し。り。も。又
 鐵。石。あ。ら。ざ。れ。ば。立。と。ろ。の。矢。廿。餘。條。よ。及。び。大。は。哮。り。一。聲。終。り。立
 縮。は。死。ま。り。鳴。呼。奇。り。う。子。鳴。呼。痛。し。う。は。猛。獸。あ。り。よ。と。く
 人。は。狎。一。言。の。恩。を。感。じ。一。兩。頭。志。を。お。ま。ぐ。一。牙。を。喪。し。主。の
 必。死。を。救。う。の。人。間。あ。も。あ。稀。あ。り。有。り。か。り。動。止。あり。この。戰
 果。後。寄。手。の。大。將。菊。池。肥。後。守。野。風。を。傳。へ。人。び。め。り。め。り。め。り
 感激。し。が。士。卒。彼。狼。が。忠。心。み。類。と。し。その。皮。を。陣。太。鼓。に。張。り。家
 の。重。器。と。あ。り。建。武。の。幸。間。寂。阿。武。重。が。時。至。り。も。な。は。れ。を
 相。傳。し。數。度。の。武。功。を。顯。し。人。間。話。休。題。白。縫。へ。一。方。を
 切。脱。し。夥。の。女。使。も。処。あ。り。押。隔。ら。れ。八。代。あ。り。後。は。後。は。後。は。後
 る。頃。も。九。三。日。の。陰。魄。も。山。挾。み。昇。り。天。結。陰。雲。雨。蕭

蕭と降生し。踏のいと暗は武者十騎あり。蕉火をあり照
し。一相走追蒐り。白縫ハ且戦ハ且走リ。又五七町落伸
えれハ八代も後追めりとおぼしめて。咄ども。回答もせり。朽
彼を撃せ。これの法んや。とち馬の頸を引入せ。只今
城火を放し。ええ。忽地西に當り。火光天に衝き。煽
し。燃揚ふ。白縫潜然と涙を流し。己あや。父も討たえん。
まが才も死む。耐至り。勅は落伸。あ。後さ。わ。せし
こそ胸ろ。い。れ。う。ハ。取期を急ん。城の火光を燭と。し。舊れ
路へ馳。ゆ。この耐八代ハ白縫を落人。爲潜。引下り。さ
ひ。逐ひ。馬。敵を拒。三騎は疾負せ。二騎を切倒し。首を取。立
あ。折。も。矢。一。あり。ハ。代。吭。の。あ。り。へ。丁。と。立。が。あ。り。も。ま

ら。倒。を。軍。兵。四。五。騎。下。り。首。を。と。り。人。と。競。ひ。白
と。立。入。り。つ。遙。よ。え。て。鎧。を。あ。け。せ。長。刀。を。水。車。の。下。り。輪
。五。騎。中。は。蒐。入。り。忽。地。切。伏。せ。薙。倒。と。その。威。勢。力。奮。然。と
し。當。人。も。あ。げ。れ。ハ。ミ。子。仰。ご。視。舌。を。挿。ひ。是。る。人。女。文。夫
と。び。え。る。爲。朝。の。内。室。あ。め。彼。い。ふ。勇。敢。も。續。く。郎。あ。も。あ。り
。只。耐。落。せ。と。罵。り。七。八。騎。の。軍。兵。彼。此。に。立。ま。れ。木。の。蔭
。岳。の。上。より。射。る。矢。は。馬。の。太。腹。を。射。せ。屏。風。を。倒。さ。ご。と
く。主。も。り。流。も。撲。地。と。顛。外。を。射。落。め。と。よ。流。こ。い。お。の。く
弓。矢。を。搔。遣。棄。太。刀。脱。ぎ。走。り。あ。り。吐。嗟。白。縫。撃。れ。入。り
え。る。処。ふ。誰。ハ。あ。り。道。次。の。藪。蔭。より。石。を。飛。せ。り。電。の。こ
先。に。軍。兵。と。人。立。地。に。打。倒。さ。れ。あ。り。五。騎。十。騎。の。半。武。士



左白八代乱箭の馬を射る



右白八代乱箭の馬を射る

あれは。今助兵あるをこころ。うまが。や。ひり。る。四散。逃奔。す。白縫。その間。突。諸膝。踏。逃。を逐。へ。走。出被。せ。を脱捨。ち。是。八町。磯。紀平治。あり。白縫。この。い。紀平治。夫。父。討死。い。ぬ。と。おほ。い。は。後。こ。い。わ。い。も。ら。う。海。り。と。る。曹司。の。仰。紀平治。と。り。ち。う。く。つ。居。て。他。ろ。易。く。身。方。の。軍。兵。大。主。死。と。し。曹司。へ。薄。疾。も。負。多。と。近。江。の。人。流。す。と。白。の。中。あ。く。如。此。の。仰。を。蒙。り。已。下。を。ひ。も。其。処。あ。く。別。と。し。あ。

夜。日。は。嗣。走。下。り。今。宵。城。の。う。ま。當。り。遠。火。光。の。發。す。驚。く。れ。あ。月。逸。ち。走。る。お。も。そ。あ。れ。夫。人。は。駭。の。敵。は。逐。り。既。小。危。く。え。え。入。へ。石。を。飛。べ。仇。を。退。け。恙。あ。ら。ず。顔。を。洗。ひ。て。是。が。お。の。僥。倖。あり。と。一。五。十。を。述。了。白。縫。は。鳥。朝。の。輒。落。伸。ま。い。い。づ。少。く。安。堵。う。れ。と。さ。う。な。曹司。あり。あ。れ。この。世。ふ。車。り。清。く。い。あ。る。才。あり。健。氣。な。り。野。風。し。と。惜。ま。八。代。か。こ。あり。と。この。ゆ。彼。ゆ。を。語り。出。漫。落。涙。あり。紀。平。治。も。臉。を。ま。つ。山。雄。と。い。ひ。野。風。と。い。ひ。主。よ。かり。と。死。せ。る。の。過。世。い。う。る。契。あり。と。ん。これ。を。入。へ。去。年。の。夏。に。君。上。路。し。小。村。野。風。拒。か。せ。し。も。か。る。べ。し。の。前。象。し。と。ま。し。引。え。紀。平。治。ハ。今。宵。の。合。戦。あ。く。後。れ。と。ま。只。面。さ。く。も。さ。ひ。ハ。八。代。敵。を。挂。く。潔。く。討。死。せ。

春記 長門 紀平治 紀平治

の。少いんをかりこく。とらひつ敵の捨より。松明の焼さるを捨ひし
ア。うり照らし。妻の死骸を引起せ。吐より項やう。笈中こそ。村
徹さ血は塗れつ。まよりてる。太刀の刃をさる。麿とて。鋸は異ひ
ね。さこそま。戦いつ。めと。おりへ。え。白縫も共。歎この数
ひぬ。か。紀平治の。木の枯枝を伐おと。死骸の上。積り。薫火
を。つ。南をと念。声と。も。忽地。焚。う。煙。なり
。の。れ。再い。敵の。逐。事。の。間。小。誘。身。と。い。ま。立。主。後。浦。曲。を。投
て。走。り。ら。う。東。雲。ち。う。り。あ。う。と。海。敵。押。隔。ら。れ。る。女。使。も。此
首。彼。首。より。ま。り。あ。り。有。斯。が。い。よ。怪。ち。ら。う。ぐ。と。て。ま。つ。が
折。姿。ま。う。の。絡。ひ。を。ま。う。く。打。戴。と。い。く。へ。と。路。も。ま。う。ぬ。火。の。氣。吐。き。ま
日。船。出。し。四。國。の。く。人。禮。せ。り。我。

第十回

為朝 單騎 江川 奔走
藤市馬を認り 北濱に到る

有左程ふ為朝の白川の山中あり。紀平治を焚茶へく。うづる。身
もさ。ゆ。敷。糸。ぬ。糸。の。波。や。滋。賀。の。都。を。後。方。ふ。の。湖。水。を。北。へ
落。り。頃。も。七。月。十。日。の。ゆ。る。ま。ま。昼。の。暑。ふ。堪。う。も。夕。さ。え。暮。れ。が
鶉。鳴。く。真。野。の。入。江。も。う。ら。ら。る。尾。花。浪。よ。り。秋。風。も。衣。吹。や。せ。ゆ。り
も。中。濱。の。こ。り。や。越。る。北。濱。の。こ。ろ。ま。ま。ま。未。多。ふ。と。こ。夜。も。ま。り。と
く。深。く。なり。と。て。も。借。る。こ。宿。も。あ。ぬ。小。樹。の。下。山。岩。の。狭。間。なり。と。ま
雲。時。憩。ひ。や。と。お。ほ。し。ら。る。路。の。傍。ふ。り。る。神。社。の。あ。り。く。ま。が。そ
馬。より。下。り。く。社。壇。に。尻。派。け。馬。を。對。て。宣。ふ。や。う。と。て。も。は。ら。を。ま
あ。さ。り。の。る。新。院。の。戦。も。勝。る。か。父。も。これ。も。夥。の。所。領。を。賜。り。と

未だ七ノ月十日のゆるまま

淋も又玉鞍金勒み栄花を示すとてさる。かく落人を金ありに
 さこそ物うくあつめ。今ハ月の暇をほささるぞ。り地もとくばさる
 した主を求よと仰つ。持とら弓をとりまほく。醫のありを打
 馬の忽地才ぶひ。北の濱方へ馳去る。かゝる馬朝ハ社内勤居
 父の行すも同胞の。宰府不務せ。妻子のすみま。何となくさ
 ぼげく。いり廣前額つ。あづく祈念志まへ。蒼ちる。あ
 室も誰魂なると怪し。れ磯う浪音松。風ハ敵のあわら
 耳を側して。まどあまぬ夢不夜も。明しく頃。もあれ。面
 高く鑢の音あがり。怪しや。馬のあ。ひ立く。わらうと。部りこら。
 格子を少一押し。又も。年紀六十あ。の老翁彼馬。さ
 しまあ。り。この老翁鳥朝をつ。又。君ハ流。の山。

君ハ在。さ。やく。い。鳥朝も彼。面影ハ。さ。あ。は。り。れ。ハ
 少。も。匿。ら。れ。ど。い。わ。る。く。ま。れ。ハ。郎。鳥。朝。り。そ。も。汝。ハ。何。人
 ぞ。と。同。い。ふ。小。老。翁。ハ。地。上。頭。を。著。君。ハ。あ。ら。う。め。さ。う。そ。れ。が。し
 と。大。殿。爲。義。朝。臣。の。馬。飼。不。藤。市。と。い。ひ。の。この。十年。あ。り
 び。身。の。暇。を。賜。了。近。江。ハ。故。御。ま。れ。ハ。比。良。嶽。の。麓。る。荒。川。の。北
 在家。退。居。獵。夫。の。業。を。ま。り。世。を。こ。り。今。ハ。老。く。ら。て
 その。業。を。勤。ぐ。人。の。射。く。う。獸。の。皮。を。買。受。れ。を。鞍。人。且
 通。子。ハ。活。業。と。致。事。あり。あ。ら。ま。さ。の。此。戦。新。院。方。打。け。る
 ま。い。大。殿。を。と。め。なり。居多。の。郎。君。も。往。方。る。落。せ。多。い
 と。傳。へ。か。り。耐。よ。と。賤。さ。の。志。を。も。え。ま。わ。り。れ。り。里。ち
 う。く。も。身。ま。り。通。夜。い。も。席。く。れ。ど。あ。ら。を。待。候。起。出

本言日民月首を存巻之四

十一



本言 別ノ首 藤市 二四

且、この馬は門は走り、頻ふ嘶らふは、いさゝか落武者の放馬
 なんとも。熟とれを視るは、豫々認得、あは爲義朝臣の秘、撒
 へ。唐鞍を置かれ、そのは父子のうちこの、つらへ落ひく。野伏
 せん、爲は討まらぬ。今さらし、小驚し、せせし、そのは亡骸ありとも
 尋索、くくはる、くはひ、この馬は、地より、走るを、あふ。あふ
 あれど、むり馬飼、馴れ馬の、ら、わ、の、よ、く、あり、馬は、来、道、を、忘
 とぬ、の、あ、れ、の、これ、が、あ、い、ま、は、ま、く、索、ま、か、か、せ、を、と、思、量、前、め、立
 へ、さ、の、り、一、馬、の、この、社、頭、小、止、り、更、不、動、只、え、れ、の、社、内、より、じ
 訖、さ、ま、君、の、む、つ、いと、幼、稚、せ、と、さ、さ、り、八、郎、君、の、相、貌、あり。
 ことを、く、く、く、や、く、山、曹、司、あり、の、を、あ、り、て、一、五、十、を、速、く、爲、朝
 斜、る、も、よ、う、い、い、や、り、さ、藤、市、と、や、ん、あ、り、あり、る、この、鞍、は、此

度、合、戦、の、料、よ、せ、よ、と、い、父、の、賜、あ、り、り、り、不、意、も、目、標、と、あり
 め、も、主、従、の、縁、や、竭、さ、る、あ、る、と、宣、ひ、爲、義、朝、臣、の、往、方、あ、れ、る
 め、さ、あ、り、馬、を、放、遣、り、その、ども、を、説、示、り、藤、市、の、或、は、た、海
 と、或、は、う、ち、は、た、り、と、か、く、家、小、湊、せ、ま、か、せ、と、い、ふ、その、志、ま、持、人
 も、却、て、む、さ、さ、ふ、似、り、さ、む、あ、り、汝、が、家、に、あり、る。竊、小、父、の、往、方
 を、も、索、ま、わ、ら、せ、と、い、さ、ら、あ、り、も、この、馬、の、汝、を、導、き、と、を、怪、し、る、は、也
 全、く、神、明、の、真、助、よ、れ、了、也。そ、も、この、社、の、何、の、神、を、あ、り、を、お、ほ、の、こ、と
 宣、ひ、つ、明、ゆ、く、さ、ふ、ら、ち、仰、ぐ、え、ま、ら、八、幡、宮、の、之、字、を、写、し、額、を
 了、ら、。越、小、氏、の、御、神、の、御、導、志、ま、く、る、疑、へ、う、も、あ、れ、は、馬、を、直、に
 進、め、ま、る、ご、ろ、も、そ、う、ぐ、ら、朝、祝、を、な、り、と、る、神、祠、に、は、る、物、を
 進、せ、ん、も、よ、ら、ま、。これ、を、男、山、へ、獻、ら、んと、宣、ひ、四五、日、の、ち、藤、市

この馬を牽く八幡へすり。鞍置るす。彼神社へ進み。せ。潜る。主君の武運を祈念し。次の日荒川へ入り。り。る。を。

第十一回

揚梅瀑布。小御曹司山標を殺。石山温泉。小武藤太。舊主を賣。

鳥朝ハ藤市ヲ誠忠を感トおぼし。その日誘引さ。荒川に到る。此と。山ふと。と。ふ。世を潜小究竟の地。なれば。と。あ。親同胞の往方を。定め。聚會。を。ぬ。ひ。事を謀る。られ。議。さ。藤市を。妻も。さ。才。ひ。の。や。ま。生活の間。あ。そ。り。大津坂本の。と。り。出。世の。同。声。を。ひ。ん。と。し。つ。も。禁。と。び。定。め。る。り。子。く。く。と。ち。せ。せ。し。し。七月の下旬。及。有。一。日。中。濱。へ。と。り。出。り。ぎ。ひ。こ。く。く。より。海。も。び。り。走。り。く。鳥朝の。ほ。り。近。く。す。り。今。世。文。殿。の。往。方。を。

定。め。り。の。し。ひ。も。あ。く。も。涙。を。潜。然。と。落。し。た。れ。ば。鳥朝。も。驚。き。く。あ。く。を。り。と。み。父。あ。捕。ま。ひ。つ。つ。と。同。じ。へ。も。あ。り。し。る。福。の。回。り。せ。せ。ま。は。る。き。び。く。同。じ。く。中。職。を。う。記。さ。し。ひ。す。て。も。人。の。や。を。ひ。ん。り。ぬ。日。軍。敗。れ。左。府。頼。長。公。の。流。矢。は。項。の。骨。を。射。せ。く。薨。り。し。新。院。と。な。り。我。朝。臣。を。と。め。と。し。光。弘。季。能。あ。ん。だ。僅。五。七。騎。供。奉。せ。られ。如。意。山。へ。入。り。を。あ。ひ。さ。ふ。く。人。々。も。暇。を。あ。り。光。弘。季。能。の。を。召。俱。知。足。院。の。邊。に。あ。や。の。僧。房。小。入。御。あり。て。脚。髪。を。お。り。し。ひ。と。終。ふ。探。し。出。され。し。ひ。の。讃。岐。國。松。山。へ。遷。り。し。ひ。ぬ。又。鳥。義。朝。臣。ハ。五。人。の。比。子。達。も。小。東。國。へ。下。向。あ。ん。と。議。し。し。代。價。を。あ。り。し。ひ。小。東。國。の。ゆ。き。の。ゆ。き。今。や。り。て。あ。い。え。里。主。の。衣。小。容。か。愛。し。義。朝。の。館。へ。赴。さ。し。ひ。頼。賢。頼。仲。為。宗。為。成。為。仲。の。五。人。の。比。子。達。

勢力竭く捕られ。義朝不預下。少納言入道信西
 為義朝父子を害せし為清盛と示し命せし叔父あり。平馬助
 忠正これ新院へ召れ。降人となり。出方を清盛らり。首を
 到そのころ清盛既お君の為不叔父を誅せり。義朝も又父を誅よと
 いらん為し。これ義朝は仰せ。此父為義法師以下五人の兄弟を誅
 せしめ。及く義朝ふく推辞多し。痛しや大殿をんじ
 め。兄弟等。船岡山。首を剉られ。刺る。幼稚をせし文
 の此子をも討せ。母君ハ幡詰の人。このころを合。悲歎
 あり。五條桂川へ投る。とい。果。義朝。泉
 の。悲。父母兄弟。黄泉の客。あり。め。朝。泉
 存命。何。父の仇。兄義朝。向。二條河原の一戦。六一

天不射。後君の爲。兄を討ん。獸。射
 一。兎の星を射。走。射
 徹。今。悔。直。潜。義朝信西
 首を操切。踏。切。死。相。はま
 ぐ。藤市。前。後。日。似。ええ
 撃。孝。只。永。亡。跡。を
 勝。諫。九。箇
 爲。朝。つ。ぼ。九。箇
 國の民の心を。宰府。下。再。九。列。を。切。從。新。院。を。竊
 出。重。祚。ま。り。日。本。國。の。摠。追。補。使。を。や。り
 膽。太。く。心。を。込。入。る。宰。府。の。形。勢。を。さ。せ。し。城。を。菊。池。原。田。原。攻

持説日産月首篇卷之四 十七

られ。男忠國も討死。白縫も焼死。とせえ。後小すん。憤り。追ふ。人やす。肘まく。鳥ふ。翼あ。さう。既ふ。左右の佐を。速。成。い。れ。又。徒。日。を。過。多。この。藤。市。家。へ。た。每。一。獣。の。皮。を。り。り。賣。五。十。の。男。あり。り。これ。が。每。一。為。朝。の。弓。強。お。の。づ。断。か。怪。有。日。藤。市。お。ま。の。お。彼。男。い。づ。比。の。ぞ。同。へ。藤。市。答。それ。が。楚。と。あ。ね。も。北。方。有。小。松。山。の。不。り。行。は。彼。づ。い。の。件。の。男。の。春。の。ろ。り。皮。を。り。り。賣。い。く。一。獣。を。取。中。ん。皮。小。鏝。の。痕。も。み。今。一。疵。さ。皮。あ。れ。の。價。を。よ。う。た。れ。敢。價。を。論。ん。も。せ。と。あ。さ。り。と。怪。物。を。さ。夜。か。り。ゆ。い。鳥。朝。多。い。さ。ん。が。怪。物。を。さ。夜。

弓強の影。既。数。回。及。べ。り。五。石。は。あ。り。て。強。も。い。と。大。や。う。あ。れ。お。の。づ。断。ん。や。う。か。も。さ。ん。人。の。目。を。り。て。これ。を。試。と。宣。へ。藤。市。の。縁。由。を。さ。不。意。も。毛。月。竦。然。と。お。は。え。る。且。い。の。今。そ。こ。の。怪。と。す。る。も。あ。い。と。宣。つ。も。引。目。の。虫。の。蟄。い。の。字。を。書。め。い。う。る。故。中。ん。と。同。小。鳥。朝。父。と。夫。引。目。鏝。の。名。あ。る。の。鏝。の。四。方。小。目。を。り。と。目。を。蟄。の。目。小。象。と。そ。の。蟄。目。と。稱。せ。り。蟄。の。陰。物。の。祖。あ。り。月。中。小。胎。托。こ。の。故。ふ。鬼。魅。ぬ。く。これ。を。怕。る。且。弓。の。れ。を。月。小。擬。矢。を。刺。し。上。強。よ。う。人。引。満。る。と。望。月。小。象。り。幾。つ。の。後。を。下。強。小。表。も。一。月。三。十。日。の。象。ハ。即。一。弓。の。上。小。明。也。表。裏。陰。陽。の。德。を。備。又。上。下。日。月。の。象。あり。天。の。二。十。八。宿。地。の。三。十。六。禽。と。ま。その。氣。を。籠。と。い。う。

春見弓懸月新清卷之四



小松山の怪
藤市の家
獣皮を
賣る

才言

矢を發さば弓の力も白
 木を用ひ男子生々として暮目鳴強の法を用てるの素強蓬
 矢子の純陽を取らりて邪魅を征し志を四方示さるの
 翌はうらむぞ彼妖の証をあつらふと宣へ藤市は感佩し
 夕ぐれをすちまらりかき鳥朝の次の日暮目の法を設け彼男をま
 ちも秋の月れ暮やまき遠き寺の鐘おとつれ日山挾小向
 入とるる後件の男生平のてく獸の皮二枚を脊負ひつ藤市が家
 の不とりちうく既ふ門は入んとてさうち仰さ呵々と冷
 咲く裡へ入るも踵を回し舊の路へ走り去るを鳥朝の物の際より
 又もみるべしこれこそ妖怪なれ遊も途さうとて矢を挟み追
 鬼もあふ彼に驚かざるまはるまはる徐ゆうとて疾く

馬の馳がごとくいよ追まも間ちうも追つれ比良の峯方も打
 南小松と北小松の間なる楊梅の瀑布のほとりおぼれ忽地彼男を
 一まひひつこの朽を遠くも隔らりふり地おつを隠し人彼か
 栖ハ正しくこのありやうとおほし彼此をえりあふ瀑布の左ふ
 まご一坦地ありきうらる榎の枝葉生茂れあり彼りこの樹蔭
 るるに躲き居るりやと芽萱踏ま入りあふ猛然とて彼
 男榎の中へ立あられ半弓彎設け押と發つ矢過ぎ由曹司の面
 上小飛ぶるを才を背き避めふ矢の觸は丁と立を立せもあつ
 捨彼の矢坪をさうと大慌二の矢を刺んとすところを鳥朝は引
 射多入鳩尾骨碎くしと射徹し鏃あうりて榎の幹へ鏗抗
 て縫うりたるそれと彼へ傾きも死るも手足を刺掻く脱え入ると鳥

新説 月前 卷之四

朝これを見多ひく。弓矢を去夏離と投捨太刀抜挿頭く走りか。
 首を礮と切多へ俄頃小山鳴り瀑布浮騰風又颯とわとり牙て木の
 葉を飛し砂を巻揚四方晦然とくく志く物の善悪もくくこの
 時しも藤市へ由曹司のふみかきとみられ蕉火ありてしくその迹を慕え
 つや風をさすりく後走り著この光景をえくく驚さつてもすくその故
 を問ふ為朝へ今この妖怪を射とめる首尾を説示し藤市これを言て
 おそく蕉火をちくあけくもくもく五十をりの男とあひしん
 身丈一丈ふすねる獣もく針のしと毛班は生出も足へ漆を塗るやふ
 黒く丸の長二寸ふ及べり首へ遙ふ飛く右手ある出角小噬著くく
 その面粗小似く粗小異あり頭の毛ハ雪の下く白く長二三尺あつて
 唇厚く舌く鼻を掩い口ハ方裂く犬は牙有り既みくくくくく

と目を刺し瞳の光人を射く。さなき生く如く鳥朝とくくく
 これ何といふ獣あんと同く藤市答く。それく山獺小影の月
 をおろしくく。いづかか獣をえくく世小く山獺あんとくく實有なる
 小く彼が栖をえ究めくく宣ひ藤市ともく榎の背に到くくく
 果く一つの洞ありく。その廣輒く人を容べく。やぐて裡に
 ぐ。さくく七八尺小く。裡に獣の骨を堆高く積置又錯く
 居多ありく。土小著くく朽腐くくもく便藤市は仰せく錢を
 画へ運び出すせつ宣く。この妖怪毎日獣を射とるく。肉ハ
 食とみ。皮をぬ家よりくく。鬻く。その皮は鏡の
 びりりく。彼くく眼小射當るあんと向小彼射つる矢のま
 飛まぬくく。尋常の月のありせハ忽地眼を射らるく

春見り長月行月日



春
説
弓
長
月
前
新
巻
之
四

七
二



揚
柏
瀑
布
小
怪
を
斬
て
銭
を
得

本
言
弓
長
月
前
新
巻
之
四

七
二

何をりくつ弓矢と云ふ一つんと宜ふも藤市も仰寔はあつて回せ
その弓矢を拾ひとりて又せまわらざるは弓の黄檀の榦を竹を合や藤
蔓を巻く他は矢の又獸の骨を削るのとおぼし。それらに焼捨よ
と仰されば藤市をほく山操の首をもむらう。寄せ柴折るひて是
を焼捨軀の皮を剥とりて錢を畏る藤蔓りて楚と脊負のひも
うけも得つさうりともち笑へぬ曹司も咲坪お入り。このゆへは
るういさこの妖怪を斬殺せりとひえなるあつて怪められし
大事小及びいんあまうこ秘まべしと宣へば藤市はと懸頭共ふ
家路は去るなり。さう御は鳥朝の矢瘥その夜俄頃痛くも堪
くく又えまへ藤市うち驚き。瘥口を洗ひ毒を去り。膏藥貼
すわいせみどそれとも速ま愈へもあつて。かる金瘡あつて石山の奥に

温泉に入りまら。日あり平愈あつて藤市はまうせす。お
ら彼必お赴き。保養せんことを宣ひら。さう又藤市は甥は武藤太
りありあり。彼幼稚く父母を喪へば藤市養ひたり。子と一
田の浦ある豪家よはくや。小厮とみ。おきつふ。この三年あり前
小賤主人の錢を盗み。さう酒の爲お用盡せ。り發覺主人大
に怒り。武藤太を直し藤市が家へ領速。彼錢を返し納め責
ひ。このる等閑は閣へ官府お告訴してす。武藤太は
藤市ももうかめえせんとり。藤市は迷惑。うらうら。その債
を償ひ武藤太を勤當。忽地お追ひ知り。かき武藤太は京
浪速を徘徊。あしき友のこと交参。賭をこの酒を嗜む。あつて
あつて明日の貯をおり。さうとつて此のころす。お物を借りて返

春巻

世をこがすふ渡りし近來もつゞき賭も負ふ事多し邪
 智も用ゑ知るより久河容とて荒川へ立入り。まがら人をばふく匿
 只顧先非を悔しありち。村長もをよめ藤市も陪話しりて
 藤市もその秘のさすふらけ引らり。つゞきとありまう。それ老
 ちて見とつりのもあふふりとのさすみく世を辞ら誰か
 後のみかどをも経営をせしむ。甥志を更け子て大なる幸なり加
 藤市曹司の湯治志多りんは彼を召俱。いよさあり。よろめ便よろしと
 深念。陪話らり。みきとふ。遂に勤當を詩し。日向後を誠
 しく。その行の所をさるふ旦の朝もごまよ起。夜の子四ころまも寝
 ぞと。眞實やふ動牛へ藤市中安堵。まがら爲朝もあり。お徳を
 まがら。有。一日武藤太よりりり。近曾。家。在。む。

一時。恩恵を蒙る人の子なり。此度所用あり。加賀國
 へ下り。折しも。俄頃。路。病。家。立。志。保養
 あり。石山の奥ある温泉よりあり。よろめ。これ
 へ生活。遣。従。い。か。な。彼。赴。よく
 心を用ひ。勦り。す。か。せ。武藤太一議。も。及。び。と。ま。す。
 といふ。この耐爲朝の矢獲。そこ。お。り。歩。行。も。中。自。在。あり。し。か。
 次の日武藤太を將。石山へ赴。七日。湯治。志。ま。い。ま。全。く
 愈。も。湯。も。中。相。應。せ。り。武藤太。の。不。到。り。し。世
 る。信。く。勦。り。進。せ。つ。竊。あり。ま。これ。洛。あり。し。世
 の風。を。さ。鎮。西。八。郎。爲。朝。を。捕。ま。し。忠。賞。拔。群。を
 下。り。それ。彼。人。の。摸。様。を。ん。身。丈。七。尺。あり。ま。回。魂。人。

こと。又そのあるところをえりて農業商賣あはてまりて疎一且こが叔
 父むう一恩を直示する人の児なりと稱一これ以管待するのこまなり
 君のてし。彼られありてこの人鳥朝ふ疑ふ。これ今告訴し過分の
 恩賞は預らば福貴らるのすめんと。さうくは流とひびひを。楚
 見究らるるものなり。人さうせむ毛を吹疵状求るあり。とやせしが
 やせまうと。とど一躊躇一信とさうつくるありて鳥朝の湯に入り
 まつを究ひ湯折のまよりみゆき。いさやう九湯治する人按摩して
 経絡忽地ふ教正ひ切験速ありと笑て浴志ふと流をみるはより
 かるるをれ。さうの肩癖をも捺む。垢をも流一まわらへうりやと
 りふ鳥朝のゆもつこまなり。そのまの夢あるをよりといひけえ。彼りよ
 まうせまう武藤太のまう。その肩をりて。退出つ。竊小笑を合ふ。彼



重負兵を
 推して
 鳥朝を
 押



為朝勇を
奮く衆兵を
殺す

武田信玄の戦

七



武田信玄の戦

八

鳥朝ハ左の肘右の肘四寸伸く矢束を引とせ起りて矢つた。
 今彼人を按摩するに其の時をよくすれば果し左の右の
 長しかる證據のあるは更ふ疑ふべし既に公の交りやう色
 も出さず詰朝又鳥朝ふりりそのれ晴昔の夢小藤市病け
 けをふんくハ何とぞ公女より今日荒川へはれ安否を
 中て立入りゆりて誠まや告いふ鳥朝ハ病けも有り
 老る養父を家不置ハさぬり疾いま緩中ふり
 と仰られ武藤太よ此に走去直不領主佐渡共衛尉重貞
 館に到りありのち告訴り重貞ハ武藤太告告を家隸
 郎おのこ俄頃小三百人の土兵を催集め武藤太を安内して
 石山の浴室を稲麻竹葺より圍せ力士十五人を擇り熊と太刀を

持せし武藤太も潜よこせけこの折も鳥朝ハ浴
 在せし武藤太つとすり只今入りてハ鳥朝ハの舟を
 一と宣ひ湯を出んとす十人組て弄とませあやう鳥朝
 信とすひくころひりといひもあんど人を擡廻吭締捨り残
 七人左右より矢庭組んと圍を忽地二人を丁と蹴殺又近より湯
 拵は押當首つと捨切捨或の拳一打倒足より踏る一息吻
 立まハ血の流れ温泉を滌屍横りて累々鳥朝ハ既武藤太
 告訴するをより多し憤不堪これを賣り栄利走る其
 愚者遊も遊といふに走りて多し武藤太ハ指して
 浴室以楚と鎖一彼甚勇力ありくやく火を放り焼殺り
 鳥朝奮然として浴室を打破り柱一本を引抜武藤太を打倒して

鳥朝奮然として浴室を打破り柱一本を引抜武藤太を打倒して

追蒐おひくもあを待設まちまする重負おもひが家隸けりとも蒐隔おひくし組くみ田いりんと競ある
 鳥朝とりあるも志こころまのど彼柱かのしらをうりまやうく打殺うちころ敵伏かたせ縦横たてよこを發はり
 働はたらきまひめとと矢疾やそいさ愈いぎ合期あひある時節ときせもさ
 ここそありられややく臂うでよりり勢力ちから究きり不意ふい撲地た倒たさ
 人ひとの夥おほの捕夫とら走りまは是こゝれ取とつこ纏まとうこいやがうへ打累うちあはれ
 即すなつちも打退うち蹴返けりまひうと五指ごしのうらう弾たまんより一卷いつま
 小この大おほ敵てきうごられ終つひは生拘なまれまへるそうて抑おさこの日ひ鳥朝とりあ一
 人を獨捕ひとりらんして打殺うちころすの二十餘よそ人傷やつその五六ご十人じ及および
 まい湯治ゆぢの鳥とりと居ゐあうせむ老幼らう男女なんの駭おそく怕おそましく逃にげまひ踏ふ
 えされ塵ちりうふられ生死せいをまへる重負おもひの鳥朝とりあを獨捕ひとりく内裏うちへ引ひき
 こひちて内裏うちへ引ひきすりられ彼の音おとふゆりのなり敵覽かたあは

至いたして周防判官季能すゑれを受うりて白しろ水干みづ袴はかま赤あか兎う惟た子こ瓜う
 被かせ髻むす白しろ櫛くしをさうせり主上ぬし河院がわ北陣きた敵覽かたあり公御殿上こうご
 人ひとのさありこれるるの駭然おそと舌したを卷實まきこの鳥朝とりあ凡人ふ
 小こあ身丈みぢの高たかや筋骨すねの逞たくまげあるまも重おも腫はりて
 の項王こうもい之これ！この人ひと矢疾やそは惱おこれ折をり縦たて千ち万ま騎きをひ
 も輒いく擗うらんもおぼえさるさあひめと為朝なる
 臆おそせるま若わかく自若おのくおひるるこれ重負おもひの此度こゝの功こうふりて
 左衛門尉さゑもん尉ゑい補おせられこよまを面目めんをほとせり。

椿説弓張月前篇卷之四畢

椿説弓張月前篇卷之四

